

平成30年度 第97回全国高校サッカー選手権大会 総評

報告者：高体連技術委員 越ヶ谷高校 野木 悟志

平成30年度第97回全国高校サッカー選手権大会が12月30日（開会式・開幕戦）から1月14日（決勝戦）の期間に開催された。優勝は青森県代表・青森山田高校、準優勝に千葉県代表・流通経済大学柏高校、3位に福島県代表・尚志高校と広島県代表・瀬戸内高校という結果となった。優勝経験を持つチーム同士の決勝は、青森山田が3-1で流通経大柏を逆転で破り、2大会ぶり2度目の優勝を果たし全国4058校の頂点に立った。青森山田は、攻守において個の高い技術と球際の強さを発揮し、今大会5試合17得点という強力な攻撃力とそれを支える伝統の堅守で日本一まで駆け上がった。準々決勝から決勝まで3試合連続で先制される苦しい試合展開であったが、ロングスローを含めた質の高いセットプレーとスーパーサブの存在で接戦を制し、粘り強く勝利をつかんだ。チームとしての戦い方やコンセプトが選手間で共有し徹底されていたことに加え、勝者のメンタリティーが備わっており、まさに日本一にふさわしいチームであったと言える。

本県代表の浦和南は1回戦で優勝候補の一角に挙げられる福岡県代表・東福岡と対戦。全国高校総体（0-3で敗戦）と同一カードとなった一戦は、リベンジに燃える浦和南が試合序盤から攻勢に出る。2分、LMF⑨草野のロングスローのこぼれ球に素早く反応したFW⑮佐藤が思い切りの良いシュートを放つが、惜しくもクロスバー直撃。その跳ね返りをRMF⑧岡田がヘディングで押し込もうとするが、相手GKの攻守に阻まれた。さらに浦和南は相手守備陣のボール回しに対し、前線から連動したプレスを掛けて高い位置でボールを奪い、MF⑩大坂がシュートを打つが、再び相手GKの好セーブに遭った。試合序盤、得点こそ奪うことはできなかったが、攻守においてアグレッシブな動きを見せる浦和南が試合の主導権を握る。守備はコンパクトフィールドを形成し、相手選手に時間とスペースを与えないことを徹底する。また、カバーリングやプレスバックの意識が高く、意図的に数的優位な状況を作り出しボールを奪うことで東福岡の攻撃を封じた。しかし、次第に浦和南のプレスに慣れ始めてきた東福岡がペースを握り、16分に意表を突くロングシュートで先制すると、21分には浦和南守備陣の連係ミスを見逃さず2点目。さらに、1分後にもクロスから3点目を奪い、東福岡が試合を優位に進める。6分間で3失点を喫した浦和南は、1トップ⑮佐藤をターゲットにロングボールを配給してタメを作り、MF⑩大坂と⑳中道を経由しながらサイドを起点に攻撃を仕掛けた。サイドを攻め込むことで得たCKやロングスローから相手ゴールへ迫るが、決定機を作るまでには至らず、0-3と東福岡リードで前半終了。後半立ち上がり、試合の流れを変えたい浦和南が前半同様に鋭い出足からボールを奪い、東福岡陣地内でプレーする時間を増やす。しかし47分、東福岡に中央を崩され追加点を許した。その後も東福岡の攻撃の特徴であるピッチをワイドに使った攻めや質の高いサイドチェンジから再三ピンチを作られるが、ゴール前での身体を張った守備で追加点を許さない。浦和南は選手交代や配置転換で攻撃に変化を加えながら最後まで果敢に相手ゴールに迫ったが、東福岡の

堅守を崩せず、0-4のまま試合終了となった。

残念ながら初戦敗退という結果になったが、前線から連続したハイプレスを掛けて攻めに転じる積極的な姿勢を80分間貫き通し、シュート数は東福岡の8本を上回る11本であった。惜しい場面も何度かあり、立ち上がりのビックチャンスに先取点を奪えていたら違った試合展開と結果になっていたかもしれない、と感じさせるような試合内容であった。地元ファンの大歓声を受け、最後まで諦めないプレーを見せ続けた浦和南の健闘を称えたい。そして、今大会での経験を糧にさらなる飛躍を期待したい。

大会全般を振り返ると、攻守の切り替えが早く、1試合を通じて全員がハードワークできるゲームスタミナとフィジカルがあり、球際や空中戦でインテンシティの高さを発揮したチームが上位に進出している傾向が見られた。また、拮抗した試合の中でロングスローを含めたセットプレーからの得点が勝敗を分ける試合も多くあり、精度の高いキッカーやヘディングの強い選手、ロングスローを投げられる選手がいることが厳しいトーナメントを勝ち抜くために重要であることを改めて感じた大会であった。さらに、昨年度の前橋育英や今年度の青森山田のように全国優勝を果たしたチームとなるとインテンシティの高さに加え、クオリティの高さも備わっている。ハイプレッシャーの中でも的確に状況を判断し、動きながら正確なテクニックが発揮できる選手が攻撃の軸となり、得点に絡むプレーでチームを勝利に導いていた。埼玉県チームが全国の舞台で好成績を残すために、そして全国レベルの選手を育成していくためには、日頃のトレーニングや試合の中で高いインテンシティとクオリティを追求し続けていくことが重要であると言える。

また、過去5大会の全国高校選手権大会の優勝チームとその所属リーグを見ると、第93回大会・星稜（プリンスリーグ）、第94回大会・東福岡（プレミアリーグ）、第95回大会・青森山田（プレミアリーグ）、第96回大会・前橋育英（プリンスリーグ）、第97回大会・青森山田（プレミアリーグ）となっている。5大会全ての優勝チームが上位リーグに所属していたことがわかる。ユース年代においてもリーグ戦文化が根付き、年間を通じて実力が拮抗したチーム（Jユースチームを含む）と昇降格の懸かった真剣勝負ができる環境が整った。その拮抗したリーグ戦環境の中でのM-T-Mの実践を通じて、選手と指導者が共に成長しチームの成熟度や完成度を高めていった結果、全国高校選手権大会での優勝につながっていると考えられる。現在、埼玉県の高体連チームからプリンスリーグやプレミアリーグに所属しているチームはない。プリンスリーグからプレミアリーグへと上位リーグになればなるほど、インテンシティとクオリティが高くなり、ハイレベルなゲーム環境が整っている。今後、全国高校選手権大会において埼玉県のチームが全国優勝を果たすためには、埼玉県の複数の高体連チームがプリンスリーグやプレミアリーグへの参入を果たし、年間を通じて全国トップレベルのチームと戦っていく経験が必要である。

昭和56年度第60回大会に武南が全国制覇を成し遂げて以来、埼玉県のチームは優勝から遠ざかっている。日常から「全国基準」をより強く意識したトレーニングや試合を積み重ねていき、次年度の全国高校選手権大会で埼玉県のチームが優勝を果たすことを期待したい。